

佳作

「私が大切にしている言葉」

―震災から帰ってきた父からの一言―

富山県立高岡西高等学校 一年

小原 柊 那

「二日一日を大切に過ごさない。」

二〇一一年三月一日、東日本大震災が起きた。私は当時、小学一年生だった。小さいながらもテレビで流れる津波や地震の映像はとても重く、恐ろしいものを感じた。また、私をもっと不安にさせることがあった。それは母親から告げられた、「お父さん、東日本大震災の救助に向かっているよ。」という言葉だった。小さい頃から父親の救助隊という仕事は輝いて見えていた。しかし、現地の状況を知ってしまった私は、何とも言えない感情に押しつぶされそうだった。正直、救助に行つてほしくないとも思つてしまった。だけど、苦しんでいる東北の方々を一人でも多く助けたいと思ひ救助に向かつた父親を想像すると、救助に行つてほしくないと思つていた自分がばからしいと思つた。そして、多くの人々の命が救われることをさらに強く願つた。

だが、私たちの願いが伝わらなかつたのだろうか。死者一万五八九五人、行方不明者一人人を超えるこの災害は、私を含め多くの人に衝撃を与えた。あの衝撃の日から何日か経ち、父親が無事帰つてきた。父親は帰つてきてすぐに、現地でのことを話してくれた。その話の中には、当時の私よりも若い子がたくさん亡くなったことなど、心が締め付けられる話ばかりだった。それと同時に父親は私に言つた。

「二日一日を大切に過ごさない。」と。

震災を目の当たりにした父親からのこの言葉は、説得力があり、私の心に響いた。明日は何が起こるのか予測もつかないし、本当にその通りだと思つた。

それからは、一日一日を過ごせるのは当たり前のことではないと思ひ、日々を感謝しながら過ごしている。身近な人からの言葉は何かグツとくるものがある。苦しいことがあつても何もかも投げ出してしまいたかつたあの時、この言葉が私に前を向かせてくれた。くよくよした気持ちで一日を過ごしてしまうのは何も意味がないように感じ、こんなことは気にしないでくださいと、わりきれた気持ちにさせてくれたのもこの言葉のおかげだ。「二日一日を大切にしない。」周りの人はたつたそれだけと思うような短い文かもしれない。しかし、私にとつてこの言葉は表しようのないくらい、父親からのたくさんの

メッセージが詰まっていると思っっている。私は父親を尊敬している。私も将来、父親と同じように人を助ける仕事に就きたいと強く思い、東日本大震災が起きてから、看護師になりたいという夢を持った。夢に向かう一日一日を絶対に無駄にはしたくない。だからこそ、今私がしなければならぬこと、それは、勉強と部活動である。将来看護師になるうえで、もちろん高い学力が必要である。また、私が所属しているボランティアをする部活動では、幅広い年齢の方と関われる機会は多いので、その一つ一つ、一日一日の活動に感謝していきたい。

私がどんなに苦しくても、どんなに悲しくてやりきれなくても、東日本大震災と父親からもらったメッセージは一生心の中にあり、私を強くさせてくれると思う。

三・一一そして父の言葉は忘れられない。
絶対に忘れない。